

12. 和束町坂尻古墳群の調査（2）

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

和束町史の編纂にあたっては、数少ない考古資料である町内の古墳について調査を継続的に実施している。撰原にある坂尻古墳群については、2020年2月～3月、同年11月～12月に実施し、すでに墳丘を中心に報告をおこなった（京都府立大学文学部考古学研究室 2021）。また、2022年1月には和束町史編さん室が主催の小学生を対象とした現地見学会に本研究室も積極的に関与するなど、活用の取り組みも始まっている。1号墳と2号墳の横穴式石室については、写真を用いた三次元計測である SfM/MVS も仲林篤史氏（本学共同研究員）の協力のもと実施しており、詳細な検討が可能になった。石室の位置づけについて、調査時は本学の学生であった岡田大雄氏に考察をご寄稿いただいた。また採集動物骨については、奈良文化財研究所環境考古学研究室の山崎健氏にご寄稿いただいたほか、同写真室の飯田ゆりあ氏に撮影していただいた。本報告にあたっては地権者の松田伸一氏、山本千代美氏をはじめとする町史編さん室各氏にご協力をいただき、聞き取りに際して大野妙瑞氏、奥村清一郎氏にご協力をいただいた。また、笹栗拓、橋本清一、三谷智広の諸氏より大変有益なご教示をえた。記して謝意を表したい。

（菱田哲郎）

2. 立地と環境（図1）

和束町は南山城東南部に位置し、京都府相楽郡に属する。和束断層谷を東から西南に流れ木津川へと合流する和束川の流域に広がる和束盆地とそれを取り囲む山々で構成される。また、和束川には杣田川、南川、中村川などの小河川が注ぎ、下流では不規則な扇状地が発達している。

町内において弥生時代以前の遺跡は明らかになっていないが、古墳時代に入ると10基ほど



写真1 調査風景1



写真2 調査風景2

の古墳が確認されるようになる。まず、東和東についてみると、和東川右岸の和東天満宮周辺では、原山古墳、福塚古墳、園大塚古墳が存在したが現存するのは福塚古墳のみである。原山古墳では四獣鏡や衝角付冑、短甲などの副葬品が出土し、5世紀後半のものと考えられる。福塚古墳では一部が掘削されるものの全長25mの円墳として復元され（京都府立大学考古学研究室2020）、採取された埴輪から6世紀前半に位置づけられる（鈴木ほか2021）。これらの古墳は眺望も良く、地域の首長墓として象徴的な位置に築かれたと推測される。また、和東川を挟んだ左岸にも三本柿ノ塚古墳や二本一古墳、大杉古墳が築かれた。三本柿ノ塚古墳は内行花文鏡や鉄剣、鉄矛、鉄鎌、須恵器が出土し、5世紀後葉に位置づけられる（樋口1961）。二本一古墳は出土した提瓶から6世紀前半から中葉の年代が与えられている（菱田ほか2021）。残念ながらこれらの古墳はすべて戦後の土地開発などで消滅してしまった。

東和東とは対照的に、中和東と西和東には古墳が点的に存在するのみである。中和東には和東川右岸に円墳であるとみられる太鼓山古墳（安積親王墓）が、西和東には和東川左岸の丘陵上に坂尻古墳群と湯谷ノ原古墳が現存する。坂尻古墳群は、撰原字坂尻に所在する2基の古墳からなる。湯谷山（標高約380m）から和東川に延びる丘陵の先端に立地し、和東川はも

ちろん対岸の長井集落や正安2年（1300）に造立された弥勒磨崖仏を一望できる。坂尻古墳群は現在の府道から撰原集落へと南に向かう道の西に面しているほか、近傍には近世の信楽道とされる旧道が通り、これを南に進み撰原峠（標高約200m）を越えたところに湯谷ノ原古墳が立地する。これらの古墳は和東盆地の縁辺部に存在することを考慮すると古墳時代の和東谷の交通を考える上で重要である。（松田篤）

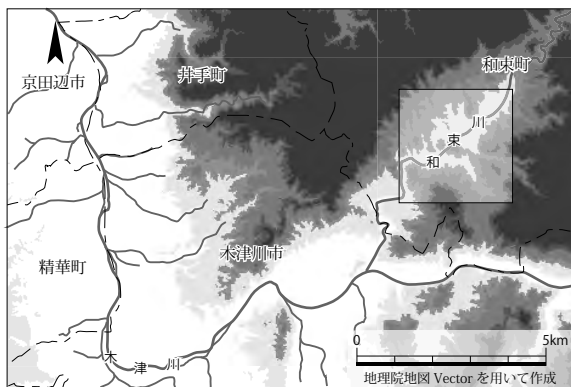
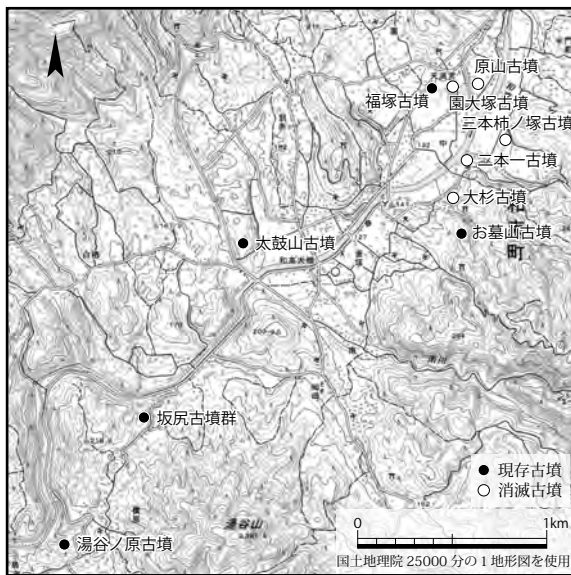


図1 和東町の古墳分布図
 (上図：S=1/40,000 下図：S=1/200,000)

3. 坂尻1号墳 (図3～6、表1)

(1) 古墳の現状

坂尻1号墳は削平を受け、盛土の大半が流出しているが、地形測量の結果にもとづけば、直径約13mの円墳に復元することが可能である（京都府立大学文学部考古学研究室2021）。埋葬施設は横穴式石室で、墳丘の南側を通る旧道により開口部は大きく削平を受けているものの、天井石を含む石室の大部分は残存しており、おおそ南西方向に開口するが、現在土砂によって完全に埋もれている。盛土の流出によって天井が露出しており、奥壁最上段の石材が抜

き取られたことで生じた空隙から石室内に入ることができる。石室の床面は流入した土砂に覆われ、その堆積は開口部に向かって高さを増す。現在、土砂が開口部側に厚く堆積し、側壁の石材が土圧により内側にやや押し出されているものの天井石はおおよそ水平を保ち、総じて残存する石室の状態は良好である。

(2) 石室の規模・構造

石室の残存長は約 3.7 m である。袖部のような玄室と羨道を明確に区分するような部位は現状では認識できない。土砂堆積の少ない奥壁付近における現状の石室高は 1.2 m、床面幅は 1.5 m、天井幅は 0.9 m を測る。床面には埋没した側壁石材の上面が現れており、現在の床面より下まで石積みが続くことがわかる。ピンポールを床面に突き刺すと 0.2 ～ 0.3 m 程下で石に当たり、側壁も石積みが下に同程度潜り込んでいることから、実際の床面はさらに 0.3 m 近く下方に想定される。

石室の石積みは各壁面で様相を異にし、全体的に整然とした石積みではないが、構築中に意図的に水平に石材を揃えたラインや石材規模の変化がところどころに看取される。本稿では、こうした石積みに対する意識が変化するラインを目地とする(図5、表1)。以下、便宜上この目地を境界として下から第1～3単位と呼称する。なお、各壁面同士の単位は必ずしも対応しない。

奥壁では標高 142.5 m と 142.9 m あたりに目地が通る。標高 142.5 m 以下を第1単位、標高 142.9 m 以下を第2単位、天井石までを第3単位とする。第1単位は長軸 0.4 m 前後の石

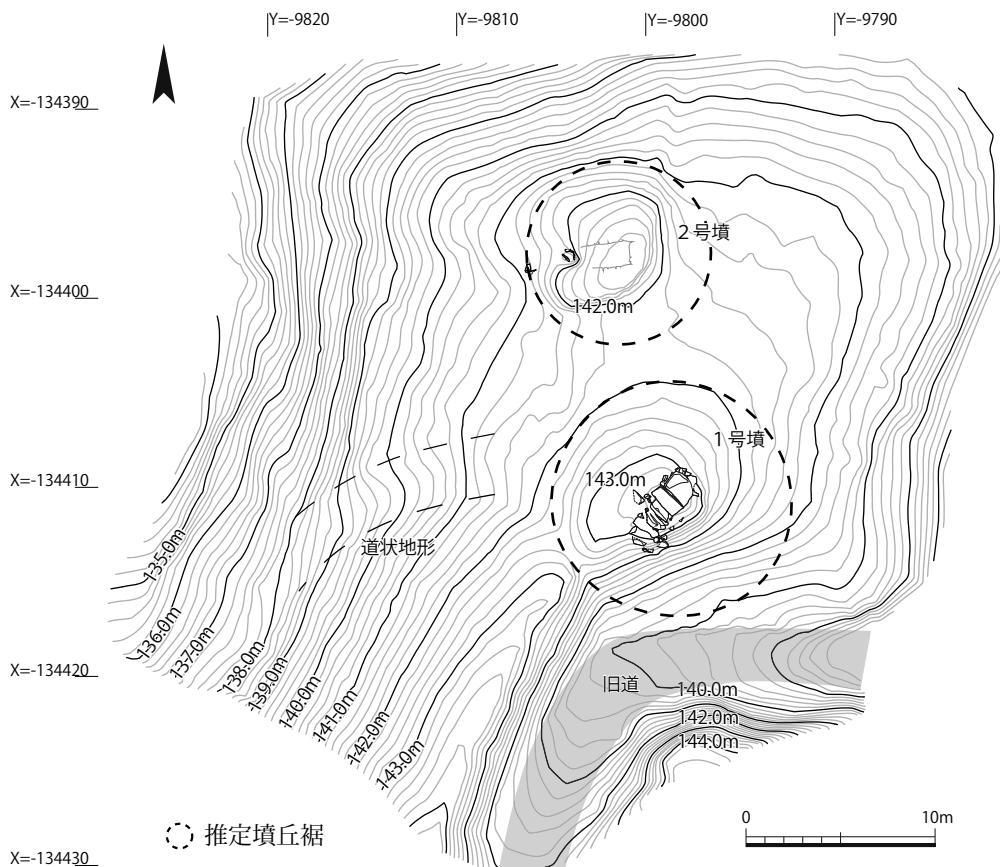


図2 坂尻古墳群墳丘測量図 (S=1/400)

材による長手積みで、第2単位では一辺0.2～0.3mの石材の小口積みにより石積み上面のレベルを整えている。第2単位までは、右側壁とは石材を交互に組み合わせながら構築するが左側壁とは一切石材を組み合わせずに構築する。第3単位は、左右の側壁それぞれに架かる長軸1m前後の長大な石材を積む。これより上位に積まれていた石材のほとんどは抜き取られているが、天井直下に残存する石材のような短軸0.2m強の石材があったと考えられる。

側壁は左右で使用される石材の傾向に差異がある。右側壁には、標高142.7mと標高143.2m前後に石材規模の変化による目地が通る。標高142.7m以下を第1単位、標高143.2m以下を第2単位、天井石までを第3単位とする。第1単位は短軸0.3m以下の石材による

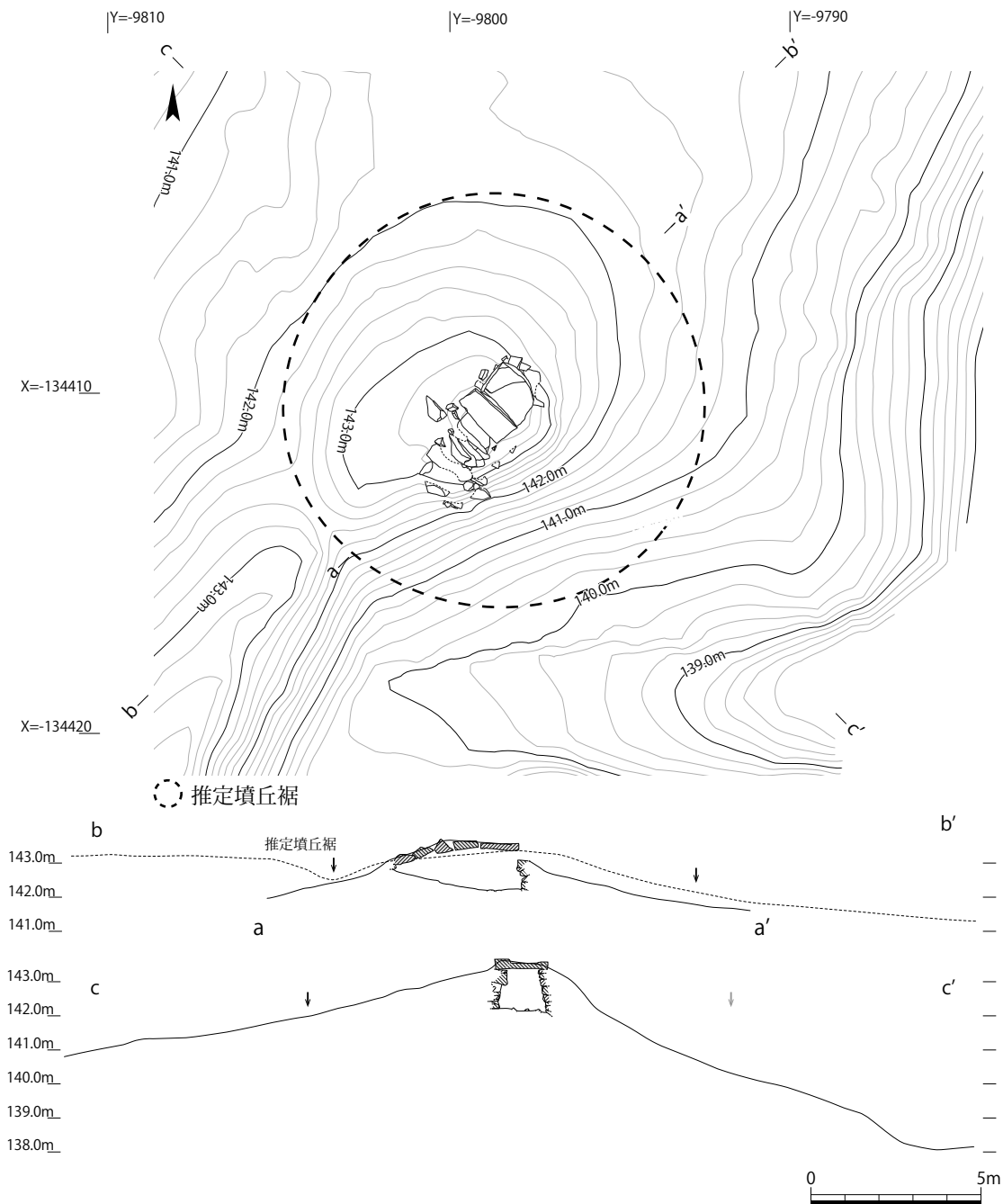


図3 坂尻1号墳周辺地形 (S=1/200)

長手積みである。第2単位は短軸0.3 m以上の厚みのある石材が多用された長手積みである。第2単位は、奥壁から3石目の天井石までは石材2段で構成されるが、そこから開口部側は1段で構成される。また、奥壁第3単位に積まれた長大な石材はこの単位の構築に組み込まれている。第3単位は短軸0.1～0.2 mの石材1段で構成される長手積みである。奥壁から4石目の天井石の端に合わせて第3単位の石積みは消失し、その位置で縦に目地が通る。

左側壁は標高142.7 mと142.9 m前後に目地が通る。標高142.7 m以下を第1単位、標高142.9 m以下を第2単位、天井石までを第3単位とする。第1単位は長軸0.4～1 mの石材を多用する長手積みである。第2単位では一辺0.2～0.3 mの石材による小口積で上面のレベルを整えている。第3単位には奥壁から長大な石材が架構される。壁面の中央には一際目立つ長軸0.8 mの立面台形状の石材が積まれ、この上には直接天井石が乗る。この大きな石材の上面のレベルにあわせて小ぶりの石材が天井まで積み上げられている。

羨道側の土砂堆積の上面から露出している石材は小ぶりで、堆積した土砂の上に固定されているに過ぎない。これらの石材は羨道部の崩落によって生じたものと考えられる。

天井石は、その大部分が露出しているが一部墳丘盛土に覆われているものもあり、ほぼ原位置をとどめているとみてよいだろう。天井石の規模は奥壁側から1石目は長軸1.5 m、短軸1.2 m、2石目は長軸1.6 m、短軸0.8 m、3石目は長軸1.3 m、短軸0.5 m、4石目は長軸1.2 m以上、短軸0.6 m、5石目は長軸1.6 m、短軸0.5 mを測り、奥壁側の天井石に規模の大きな石材を使用する傾向がある。1～3石目までは石室内の天井高が比較的水平だが、4石目から開口部側へ向かって天井高が徐々に低くなる。また、4・5石目は1～3石目までと異なり石材が開口部方向へ下降気味に傾いて架構される。

(3) 石室形態の推定

1号墳は開口部側が削平を受け羨道部を観察することは難しいものの、現状できる範囲の観察から羨道部を含めた石室形態を推定する。

まず、天井高の変化に着目すると、奥壁から3石目の天井石までの約2.6 mの間は天井高が一定だが、そこから先は開口部へ向かって低くなっていく。側壁に袖部は確認できず明確な前壁をもたないが、後述する右側壁の縦目地に対応する位置で天井高が変化することから、玄室と羨道の違いを意識した石室構造である可能性が高いだろう。

次に、石室の平面形態に目を向ける。土砂の堆積が水平でないため、現状の床面の実測図では歪みが生じる。このため三次元モデルから一定のレベルで水平に切り出したオルソ画像を用いて、平面的に検討をおこなう(図6)。左側壁は外形が直線状をなすが、右側壁は羨道方向に向かうにつれて外形が内側に狭まっていく様子が看取できる。左側壁とは対照的な右側壁の外形は平面形態に由来している可能性は高いだろう。

そして、右側壁の構築に目を向けると、第2単位は奥壁から3つ目の天井石の位置は縦方向2石で構成されるが4つ目の天井石から1石で構成されると同時に、この天井石の端にあわせて右側壁の縦方向にも目地が通る。明確な袖部をつくり出さないものの、ここに石室構築上の玄室と羨道の区分をみることができよう。また、奥壁から5つ目の天井石から右側壁第3単位が消失し、意図的に石室の高さを減ずる意図が看取できる。右側壁が奥壁と一体で構築されることから、奥壁と右側壁が石室プランを大きく規定している可能性が高い。

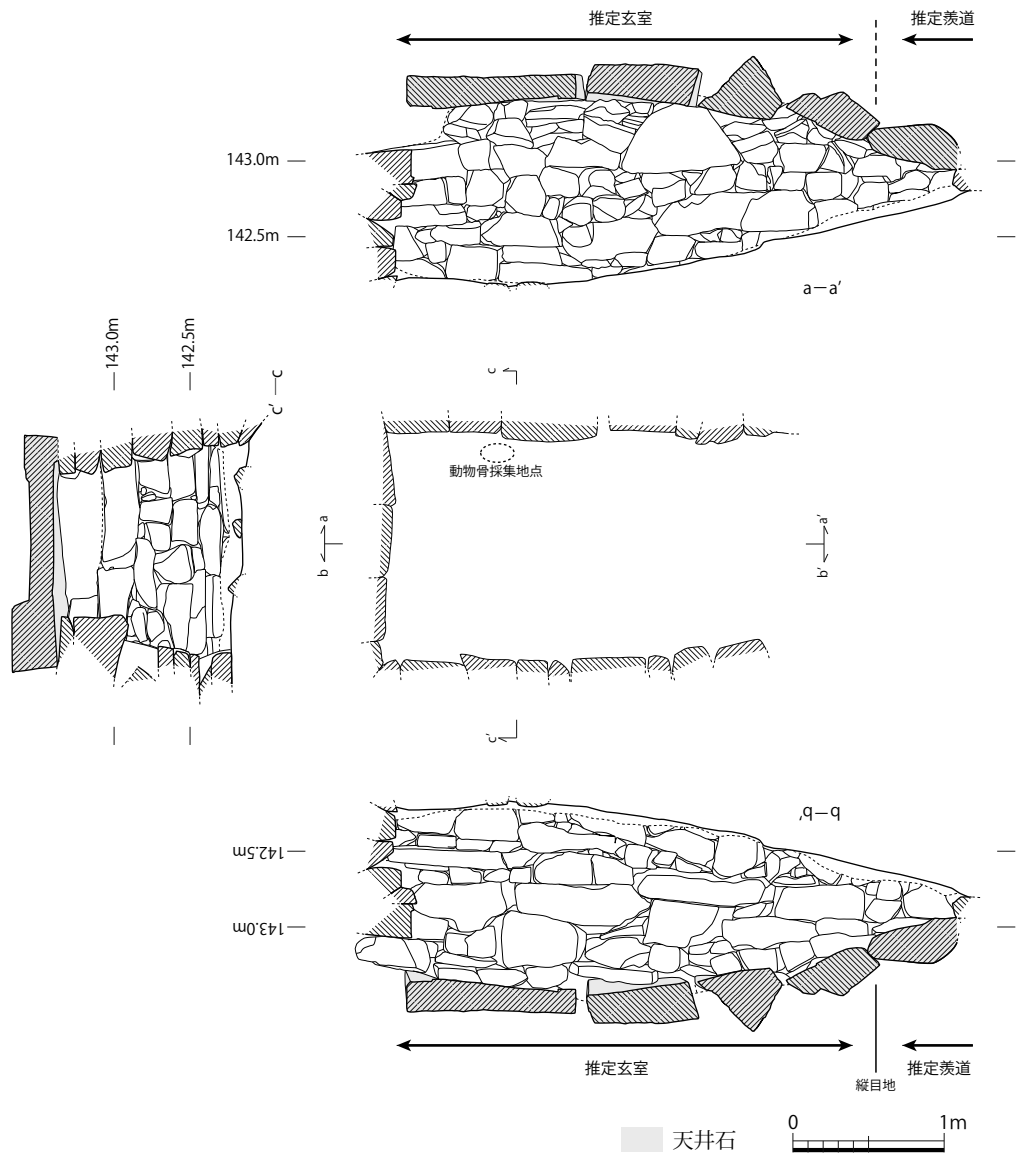


図4 坂尻1号墳石室実測図 (S=1/50)

表1 坂尻1号墳石室の構築単位

壁面	範囲	石材の使用傾向	単位
奥壁	L=142.5m	長軸0.4m前後、短軸0.1m前後の扁平な石材を主に使用	第1単位
	L=142.5~142.9m	一辺0.2~0.3mの石材を主に使用	第2単位
	L=142.9m~天井	厚さ0.2m以上の石材（側壁に加工する長大な石材を含む）を使用	第3単位
右側壁	L=142.7m	長軸0.4~0.9m、短軸0.3m以下の扁平な石材を主に使用	第1単位
	L=142.7m~天井直下未満	長軸0.6~0.9m、短軸0.3~0.4mの石材を主に使用	第2単位
	天井直下	短軸0.15m前後の石材を使用	第3単位
左側壁	L=142.7m	長軸0.4~1.0m、短軸0.1~0.25mの扁平な石材を主に使用	第1単位
	L=142.7~142.9m	一辺0.2~0.3mの石材を使用	第2単位
	L=142.9m~天井	長軸0.8m、短軸0.4mの石材を一石中心に据え、長軸0.2~0.5mの石材を使用	第3単位

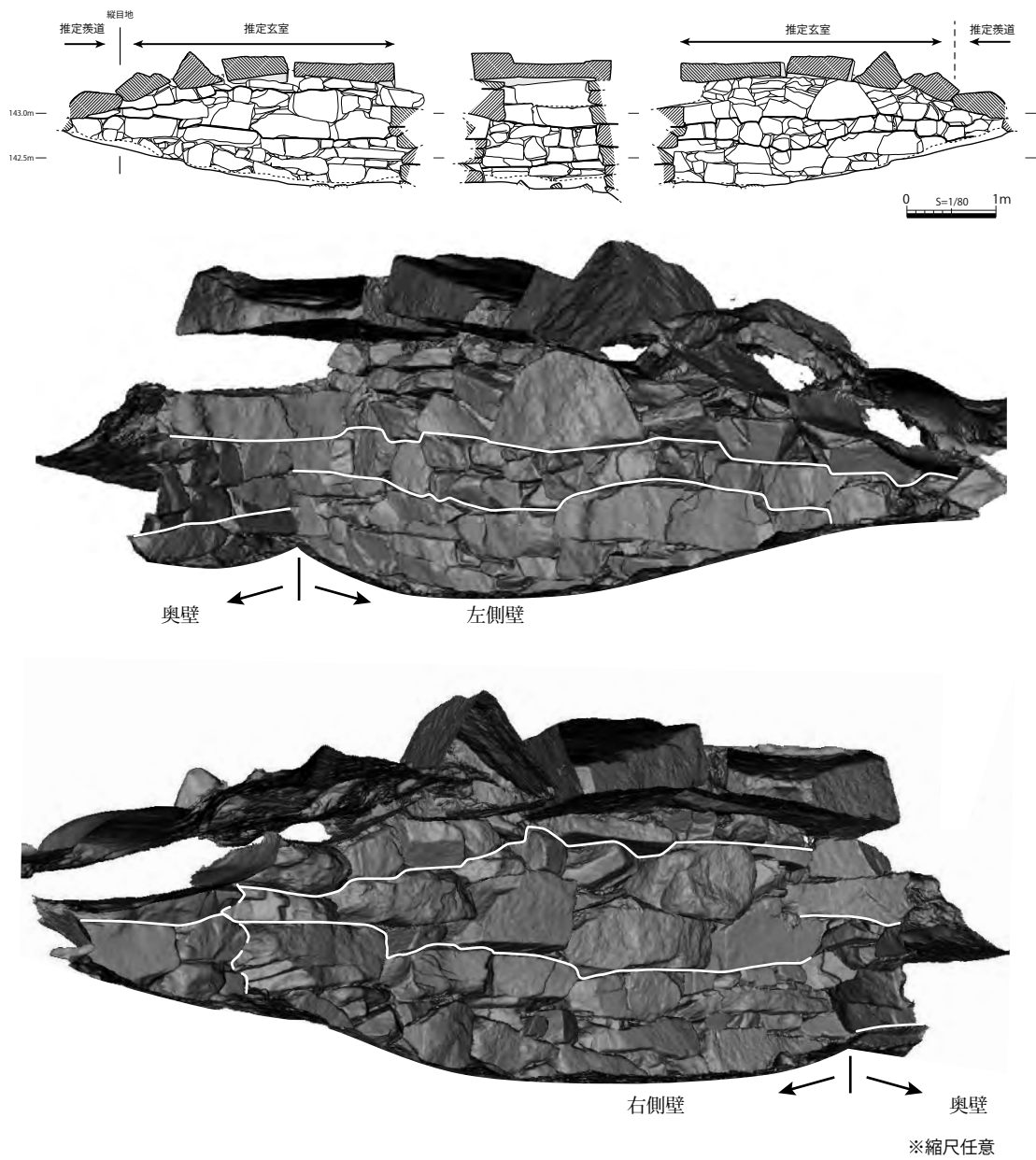


図5 1号墳石室の目地

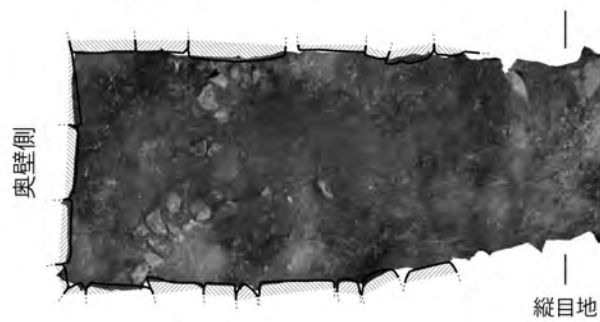


図6 1号墳石室床面の実測図とオルソ画像の重ね合わせ (S=1/50)

以上のように、天井高の変化と右側壁の縦目地から、明確な袖部をつくりださないながらも縦目地により壁面の石積みを玄室と羨道で二分する意図を見出すことができる。このように考えると玄室長は約 3.2 m に復原される。また、床面形態については道の幅が右側壁から狭められており、右片袖状ともいえようか。ただし、1 号墳には南西方向から墳丘に向かって尾根が伸びており、開口部の正面を地形が遮るような地形であることから、石室を構築する際に尾根を避けるようにして、羨道部を意図的に若干東へ反らした可能性がある。（溝口泰久）

4. 坂尻 2 号墳（図 7～9、表 2）

（1）古墳の現状

坂尻 2 号墳も大きく削平を受け、特に墳丘東側の損壊が顕著であるが、地形測量の結果にもとづけば直径約 10 m の円墳に復原することが可能である（京都府立大学文学部考古学研究室 2021）。羨道側天井石の崩落により本来の開口部は失われているが、西方向に開口し、崩落した天井の空隙から石室内に入ることができる。床面には土砂が堆積し、開口部に向けて堆積は高さを増す。開口部付近では側壁の一部が土圧の影響で内側にやや押し出されている様子が看取される。天井石をはじめ石材には亀裂が走り、石室はやや不安定な状態にあるといえる。なお、開口部から南西方向に石材が点在しているが、石室に伴うものであるかは不明で加工痕などは確認できない。

（2）石室規模・構造

石室内の土砂の堆積は著しく、開口部側は土砂で埋没し明確な羨道部は確認できない。現状の石室残存長は約 3.6 m である。土砂の堆積が少ない奥壁付近では石室高 1.1 m、床面幅は 1.2m、天井幅は 0.9 m を測る。現状の床面は標高 140.7m であるが、土砂が堆積しておりピンポールで調べたところ、0.2 m 程度下方に本来の床面の石敷きがあると想定される。

石室には標高 141.3 m、141.7 m あたりに石積みの変化による目地が通る（図 9）。以下、便宜的にこの目地を境界に標高 141.3 m 以下を第 1 単位、標高 141.3 m から天井石までを第 2 単位とする。なお、2 号墳の場合は各壁面の目地が対応している。

奥壁の第 1 単位では一辺 0.2～0.4m の石材を小口積みにし、上面を長軸 0.15～0.2 m の扁平な石材の小口積みでレベルを揃える。ここまで右側壁とは石材を組み合わせながら構築するが、左側壁とは図 9-①の石材以外噛み合わせずに構築する。第 2 単位では左右の壁それぞれに架かる長軸 0.7 m を超える石材を用い、隙間に一辺 0.1 m 前後の方形の石を三段積み上面を整え、上に 0.1～0.3 m の不揃いな石材を 1 段積んで構築する。

側壁は左右の壁面で使用される石材の傾向に差異がみられる。右側壁は第 1 単位では長軸 0.2～0.4 m、短軸 0.15 m ほどの石材の長手積みで、奥壁と噛み合わせながら構成される。第 2 単位では石室の中央に長軸 0.6 m、短軸 0.4 m ほどの巨大な石材 2 つを 1 段積み、その上に直接天井石が載る。その石材の両側は第 1 単位と同等の石材を 2 段長手積みにし、巨石と上面レベルを揃えている。奥壁から架構される長大な石材はこの単位に組み込まれるが、中央の巨石との隙間に小ぶりの石材を積む。

左側壁の第 1 単位は主に長軸 0.2～0.3 m、一部に長軸 0.6 m を超える短軸 0.1～0.2 m の石材を長手積みにする。3 段目まで奥壁と組み合わせずに構築され、上面レベルを合わせた①の

石で奥壁と組み合わせる。開口部側へ向けて長軸が短い石材の使用が多くなる。第2単位では3石目の天井石まで短軸0.2 mほどの石材を3段長手積みにし、天井までを構築する。

天井は現状で4つの石材が原位置を留めて架構されている。天井石の規模は奥壁側から1石目は長軸1.2 m以上、短軸0.7 m以上、2石目は長軸1.2 m以上、短軸0.9 m、3石目は長軸1.2 m以上、短軸0.5 m、4石目は長軸1.2 m以上、短軸0.6 mを測り、1号墳と同様に奥壁側の天井石に規模の大きな石材を使用する傾向がある。各天井石の間に隙間があり、そこには小ぶりな石材を充填している。石室の長軸方向では天井高がほぼ水平を保っているが、土圧の影響を受けて短軸方向では奥壁から2石目以降の天井石は右側壁に向かって傾斜しており、比高差はおよそ0.1 mである。

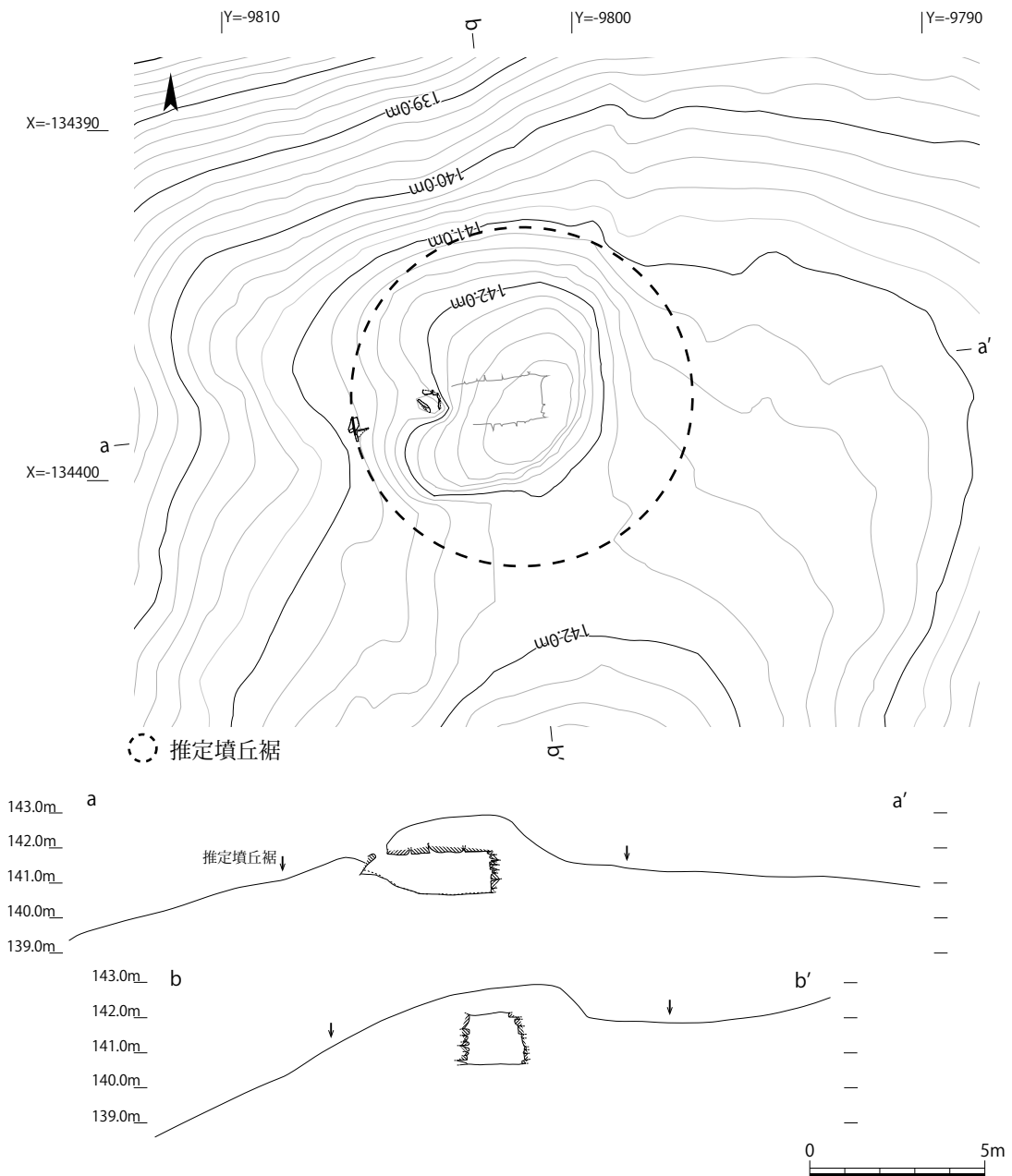


図7 坂尻2号墳周辺地形 (S=1/200)

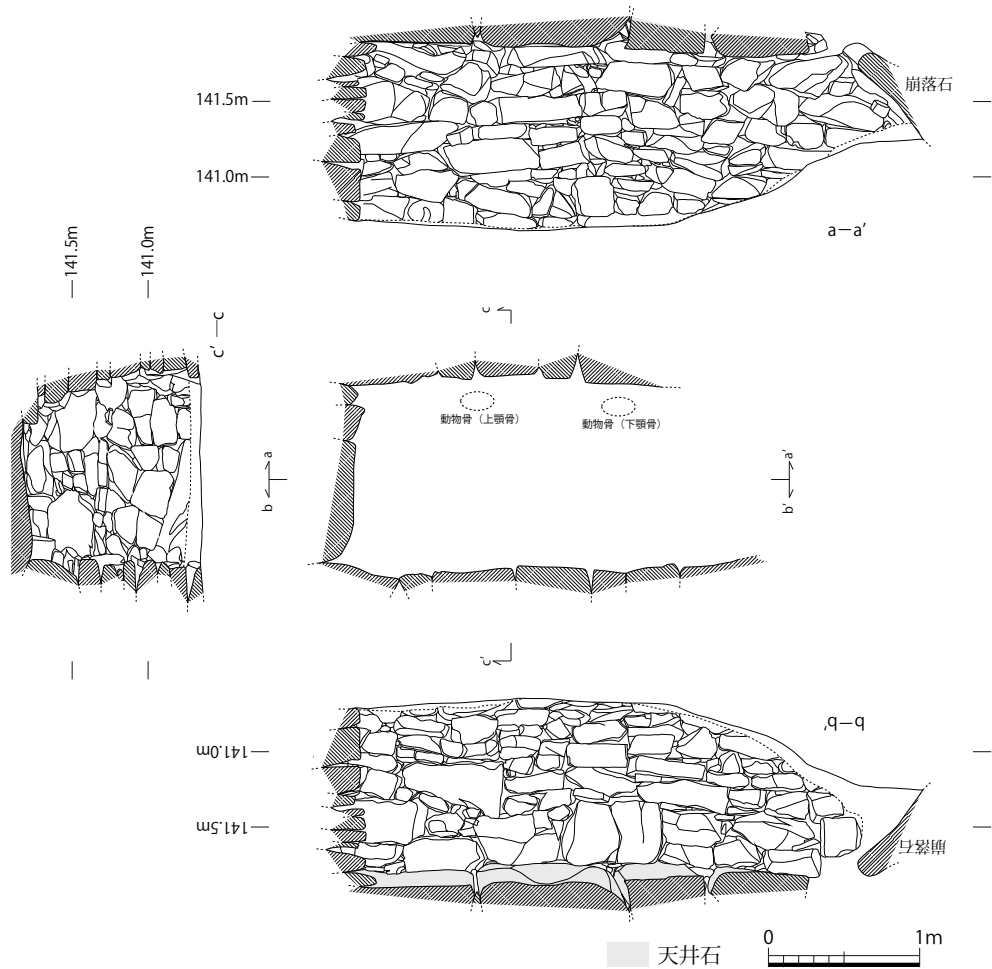


図8 坂尻2号墳石室実測図 (S=1/50)

表2 坂尻2号墳石室の構築単位

壁面	範囲	石材の使用傾向	単位
奥壁	L≈141.3m	一辺0.2～0.4mの石材と、長軸0.15～0.2m前後の扁平な石材を主に使用	第1単位
	L=141.3-天井	厚さ0.2m以上の石材（側壁に架構する長大な石材を含む）を主に使用	第2単位
右側壁	L≈141.3m	長軸0.2～0.4m、短軸0.15m前後の扁平な石材を主に使用	第1単位
	L=141.3-天井	長軸0.6m、短軸0.4mの石材を一石中心に据え、長軸0.2～0.4m、短軸0.3～0.4mの石材を主に使用	第2単位
左側壁	L≈141.3m	長軸0.2～0.6m、短軸0.1～0.2mの扁平な石材を主に使用	第1単位
	L=141.3-天井	一辺0.2m前後の石材を使用	第2単位

2号墳は開口部側が崩落しているため、その構造の観察は難しく、側壁からも玄室と羨道を意識して造り出すような構造は認められない。現在の開口部から尾根の斜面までは約3mと短く、墳丘の削平を勘案しても長大な羨道部が取り付け可能性は低く、羨道部が短い、もしくはほとんどないものと考えられる。(守田悠)

5. 坂尻古墳群の石室構築

(1) 1号墳石室の構築過程

坂尻1号墳は旧道により削平を受け、羨道部が埋没し盛土の流出が見受けられるものの、全体としては石室が良好に残存しており、周辺地形との関係性をなお検討できるものとする。

そこで、地形測量と石室実測の成果から、地形との関係性を含めて石室構築過程について分析する。

掘方の掘削 現状の床面は標高 142.2 m であるが、推定される墳丘裾の標高は 142.2 ～ 143.0 m にはおさまるとみられ、開口方向の南西側裾部よりは床面の標高が約 0.3 m 以上は低い。石室は尾根上に築かれていることから、原地形の時点では裾部周辺の方が石室床面より標高は高かったであろう。流出した墳丘盛土で本来の裾部が埋没していることを想定しても、現状の床面に厚さ 0.3 m 程の土砂が堆積していることを考慮すれば、築造当初の裾部と床面に比高差はあったものと考えられ、石室構築前に地山に掘方を設けた可能性が高い。掘り込みの深さを考える上で、石室両側壁で標高 142.7 m に目地が通ること注目したい。この標高が掘り込みの深さと一致すると考えると、石室構築以前の地表面は傾斜をもっていたことは考慮すべきだが、標高 142.7 m 前後に復原される。この場合、現状の床面を参考にすると石室の掘方は最大深さ 0.5 m 以上となる。

石室の構築 目地により設定した構築単位をもとに、石材ごとの荷重のかかり方などを加味して石室の構築過程の推定を試みたい。

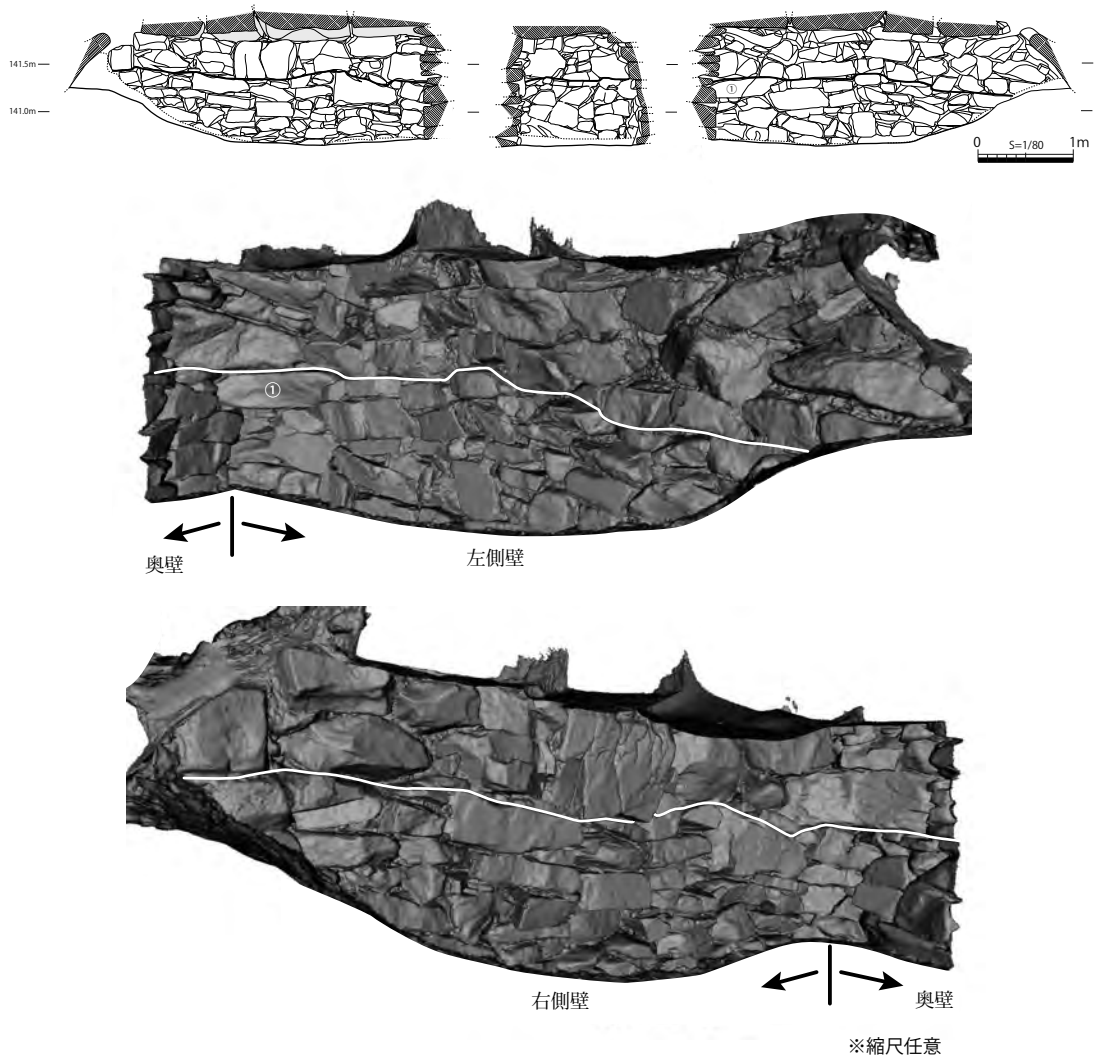


図9 2号墳石室の目地

側壁は左右によって、石材の使用傾向や奥壁との関係性が異なっているが、標高 143.0 m 前後で奥壁から両側壁それぞれに長大な石材を 1 石架構する点は共通する。

右側壁は奥壁と共有する長大な石材より下方でも奥壁と右側壁の石材が交互に組み合うようにして積まれている。そのためそれぞれの壁面の目地はあまり対応しない。第 1・2 単位でも奥壁と石材を組み合わせることから、奥壁と一体で構築されたと考えられる。

図 10 に各側壁と奥壁の石材の組み合わせを示した。奥壁—右側壁石材ごとに与えた番号は石材の荷重の掛かり方から推測した石積みの順序を表わす。石材の組み合わせと構築単位から構築順序を推定する。①は順序を決定できないため複数の石材に設定したが、右側壁の②は奥壁の①に乗ることから奥壁第 1 単位を先に構築していることがわかる。⑤までは互いに組み合わせずに構築され、右側壁第 1 単位最上段の石材の⑥が奥壁と右側壁に架かる。右側壁第 1 単位を完成させると同時に奥壁の構築へ移行すると考えられる。また、⑧の段階で奥壁第 2 単位を構築し終え、右側壁第 2 単位最下段の⑨を積む。その上に長大な⑩を奥壁と右側壁の隅を消すように架構するが、ここでは目地をつくり出す意識はみられない。⑪～⑬で右側壁第 2 単位を完成させ、奥壁に⑭を積む。⑭の上面ラインに合わせて、天井石⑯を支える⑮などの石材からなる右側壁第 3 単位を構築する。このように、奥壁と右側壁は石材の組み合わせ順序が、目地によって設定した単位と相関している。

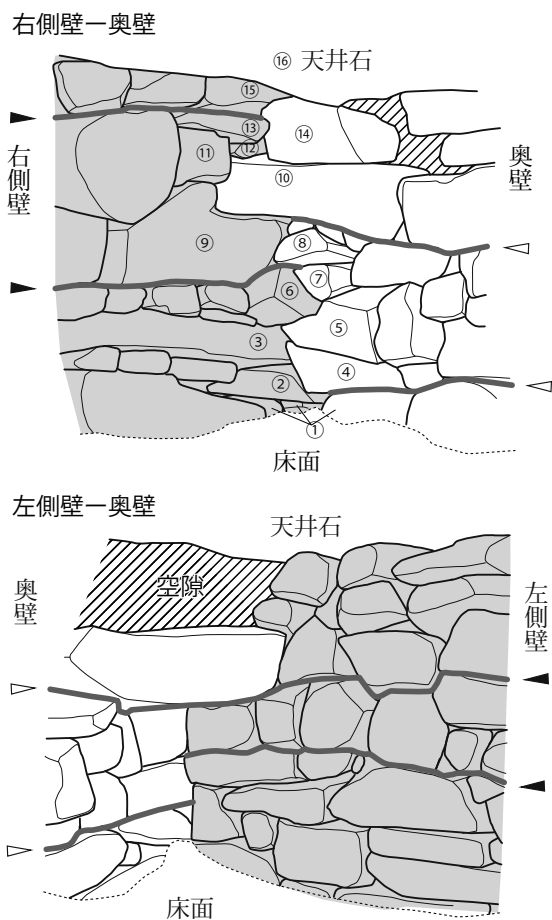


図 10 1 号墳における石室石材の組み合わせ

一方で左側壁は第 2 単位以下の石材は奥壁と組み合わない。第 2・3 単位間の目地を水平に整えた上に、奥壁から左側壁に架かる長大な石材が積まれ、右側壁の様相とは異なる。全体的に左側壁の目地は水平に通る。注目されるのは、左側壁第 3 単位に属する立面台形状の大きな石材に天井石が直接載る点である。右側壁においては、天井石直下の第 3 単位に小ぶりの石材を積み上げて天井高を調整するのとは対照的である。大きな石材によって天井高を規定する左側壁第 3 単位に天井高を合わせるようにして小ぶりの石材を積み上げる右側壁第 3 単位という、天井石を架構するためのプロセスにおける左右の側壁の対応関係を看取できる。

(2) 2 号墳石室の構築過程

次は、前項でおこなった 1 号墳の検討を参考に 2 号墳石室の構築過程について考えてみたい。

現状推定される墳丘裾の標高は 141.1 ~ 141.4 m である。これに対して現状の

床面は標高 140.6 m であり、本来の床面をさらに下方に想定できるため、石室構築前に掘方を設けていたのは確実である。ここで注目されるのは石室の目地が標高 141.3 m を通ることである。これは推定墳丘裾の標高とも一致するため原地形の標高を示している可能性が高く、その場合、深さ 0.7 m 以上の掘方を想定できる。この目地より下方の第一単位はこの掘方を利用して構築され、小ぶりの石材を壁面に貼り付けるようにして積み上げたと考えられる。なお、第 1 単位は奥壁と右側壁の石材が噛み合い、相補的に構築されている。

第 2 単位は右側壁に大ぶりの石材を使用して石積みの高さを稼ぐ。奥壁と両側壁の隅を消すように大ぶりの石材を架構する。こうして積みあがった壁面に天井石を架けている。

(3) 坂尻 1・2 号墳の共通点と相違点

1 号墳と 2 号墳の関係性について考えるため、両石室を比較してみると、共通点と相違点が看取される。

まず、共通点については、すでに強調してきたところであるが、奥壁と両側壁の上半部に大きな石材を架構するという共通点を挙げられる。これは少なくとも和束町周辺の古墳にはあまりみられない。坂尻古墳群の特徴であり、1 号墳と 2 号墳が同系譜の石室であることを示している。また、奥壁と右側壁の石材を組み合わせながら石室を構築する点も共通する。一方、相違点については、2 号墳の方が 1 号墳よりも掘方が深い点や、石室の位置自体が地形的に低い点が挙げられる。また、石室の平面形態もやや異なっている。1 号墳には羨道と玄室を区分する意図が看取できるが、2 号墳には現状羨道のようなものが認められない上に、開口部が斜面に面していることや前述した石室の位置が低いといったことなどの地形的な制約から羨道をもったとしてもあまり発達していなかったと考えられる。両古墳の石室の間には、特徴的な部分は共有しつつも、構造上に差異が認められ、時間的な間隔が想定されよう。(溝口)

(4) 坂尻古墳群の築造順序

既往の報告では、2 号墳に対して使用石材、石室規模が大型化する 1 号墳の方が後出すると想定されている(奥村 1990)。この見方を大きく変えるような時期比定の可能な遺物の出土や採集はないものの、前項までの検討を踏まえて、再検討をおこなってみたい。

まず、立地の面では、後世の地形改変を考慮する必要があるが、2 号墳は尾根の先端よりの開けたところにあり、墳裾の成形をさえぎるものはないのに対し、1 号墳は丘陵斜面の際に位置し、墳裾や羨道が地形の制約を受けている。また、2 号墳へのアプローチは 1 号墳付近を経由する以外になく、2 号墳の築造時には 1 号墳が障壁になる位置関係にある。

次に石室をみると、1 号墳は全体的に大ぶりで角ばった石材をいくつかの目地を設けて段階的に積み上げていくことで、隅部が直角をなし平断面が矩形に近づいている。対して、2 号墳は丸みの帯びた小ぶりの石材を 2 段階で一気に積み上げたと考えられ、石室の隅部や全体形もやや丸みを帯びたつくりとなっている。1 号墳が玄室と羨道の区別をもつ横穴式石室と想定されるのに対して、2 号墳は横穴系の石室でありつつもそのような明確な羨道を認識できないことから 2 号墳から 1 号墳へ石室の構築や形態が定形化する変化を想定できる。

以上のことから、既往の報告と同様に 2 号墳が 1 号墳に先行するものと考えておきたい。

6. 石室構造からみる坂尻古墳群の年代的位置付け

(1) 位置付けの方法

坂尻古墳群の年代的位置付けについては周辺地域の石室との比較によるほかない。坂尻古墳群からみて北方に広がる和東盆地内では石室を有する古墳は多くないが、南方の和東川と木津川の合流地点やや下流側に広がる加茂盆地にはいくつかの石室墳が確認される（図 11）。両者は盆地同士で隔たりはあるものの和東川によってつながり、後世には信楽道で接続する関係にあることから、加茂盆地は比較対象として一考すべき地域であろう。以下では和東盆地および加茂盆地の古墳と比較することで坂尻古墳群の年代的位置付けを試みたい。

(2) 和東盆地の古墳

現在、和東盆地で確認されている古墳のうち石室を有することが明らかなものは坂尻古墳群と福塚古墳のみである。福塚古墳は坂尻古墳群より上流の右岸に位置し、竪穴系と推測される石室が露出している。採集された埴輪から MT15 型式並行期（6 世紀前半）と推定されている（鈴木ほか 2021）。石室の構造は定かでないが、典型的な横穴式石室が導入される以前の様相を示していると考えられ、横穴式石室を採用する坂尻古墳群より先行する可能性が高い。

また、石室以外の埋葬施設の例としては、和東川左岸にある三本柿ノ塚古墳がある。粘土槨を有していた可能性が指摘され（樋口 1961）、出土した須恵器杯や広口壺から 5 世紀後葉に位置づけられる（菱田 2015）。このほかに福塚古墳の付近に立地する原山古墳（5 世紀後半）や、時期が近い二本一古墳（6 世紀前半から中葉）などがあるが（菱田ほか 2021）、埋葬施設は明らかでない。

現状では、福塚古墳が和東盆地において埋葬施設に石室を採用した古墳のなかでも早い段階のものといえる。

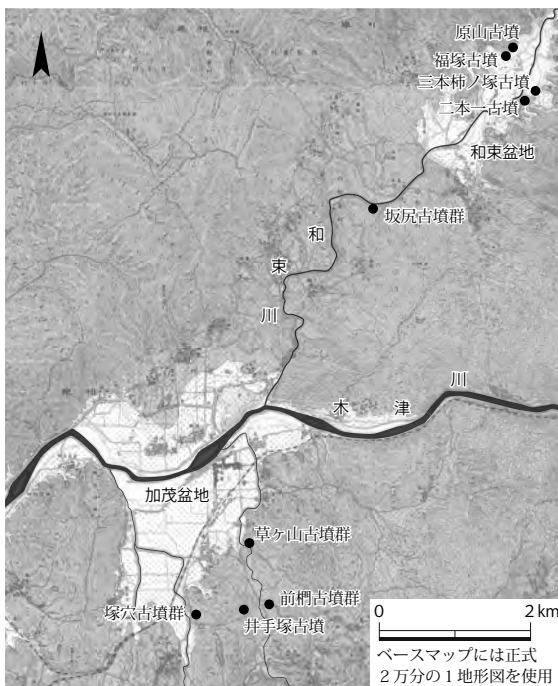


図 11 和東盆地と加茂盆地の古墳分布
(S=1/100,000)

(3) 加茂盆地の古墳

加茂盆地で埋葬施設が確認された古墳には草ヶ山 1 号墳、前柵 2 号墳、井手塚古墳、塚穴 1 号墳がある。

このうち草ヶ山 1 号墳は盆地東側にある丘陵端部の尾根上に 2 号墳と東西に並び築造される径 14 m 程度の円墳で、東西に主軸を向ける石室を有する（図 12）。未発掘のため定かでないが西へ開口する全長 4.2 m、幅 1.3 m 程度の竪穴系横穴式石室と推定されている（奥村 1996）。石室には小ぶりの角礫が使用され、左右の側壁は上方に向かって内傾している。東側は崩落した天井石の奥に明確な壁面があることが確認されるのに対し、西側には閉塞石とみられる乱雑な石積みがあり、墳頂面に陥没孔が存在する。床面は土砂

の流入が厚いが、現状確認できる最低の標高は推定される墳丘裾部よりも上方に位置するとみられる。

草ヶ山1号墳は立地や石室構造の面で後述する3例とは大きく異なる。石室の規模や石積みは坂尻古墳群にも類似する一方で、開口部の構造や墳丘と石室の位置関係においては坂尻古墳群とは異なり、竪穴系埋葬施設の要素が強いと評価できるだろう。

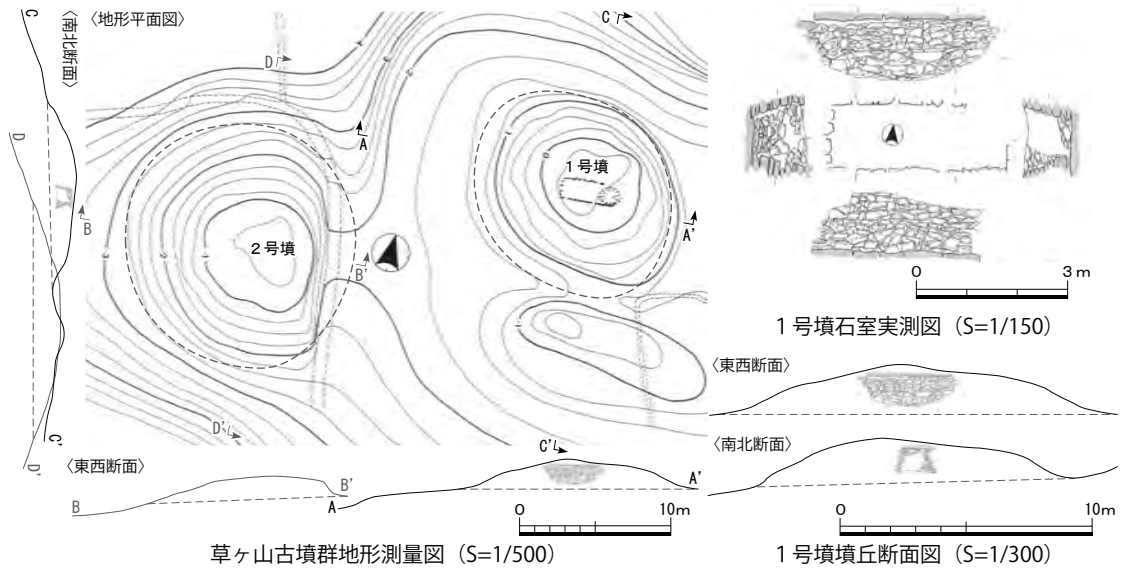


図12 草ヶ山古墳群地形測量図及び石室実測図（奥村1996をもとに作成）

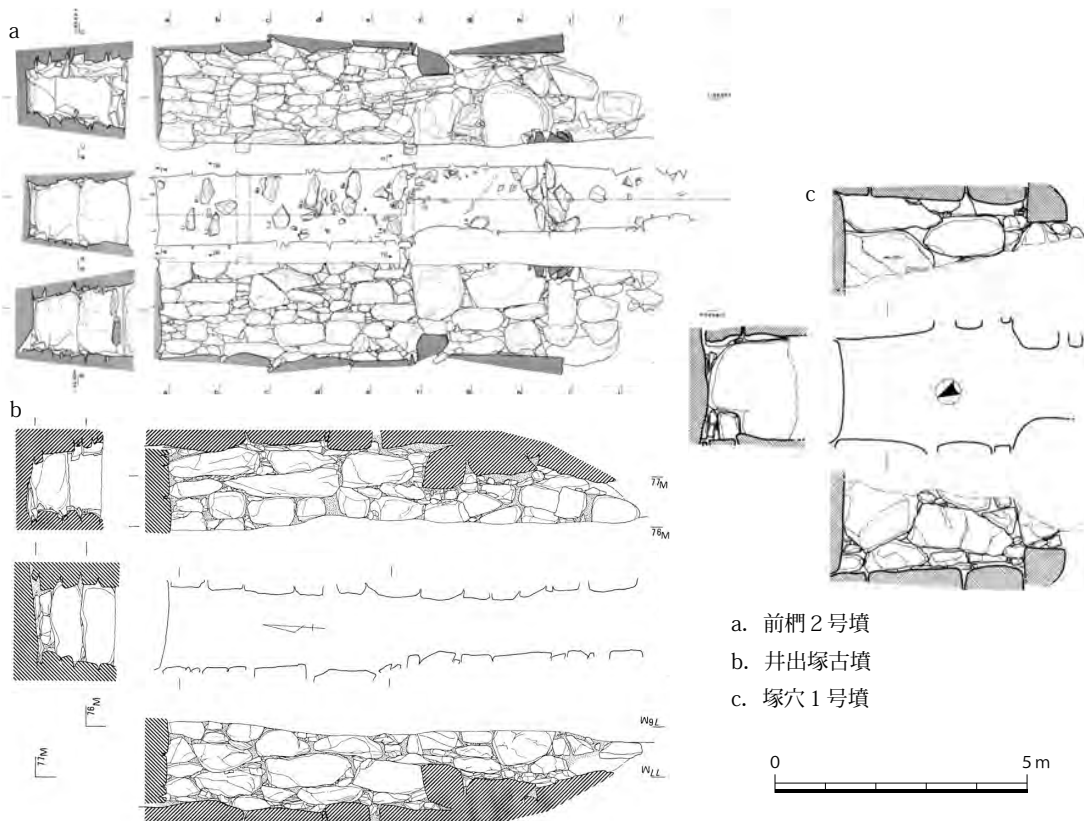


図13 加茂盆地の横穴式石室（S=1/150、戸原ほか1982、長谷川1981、奥村1988）

他の3例はいずれも横穴式石室でおおむね南へ開口する(図13)。盆地南方へ向かうルートに沿うように分布するという点からも草ヶ山1号墳とは異なる特徴がみられる。竪穴系の要素を古い段階のものと評価するのであれば草ヶ山1号墳は他の3例に先行すると考えられる。

横穴式石室3例のうち前柵2号墳と井手塚古墳の石室は全長が10m前後の長大なもので、玄門部にまぐさ石を設ける点や左袖部の方が突出する両袖式である点が共通する。前柵2号墳では発掘調査がおこなわれており、出土土器からTK43～TK209型式並行期に位置づけられる(戸原ほか1982)。井手塚古墳(長谷川1981)も同様の石室構造であることからこれに並行する、もしくは奥壁の1石あたりの高さが前柵2号墳よりも低いことを評価するとやや先行するものと考えられる。

塚穴1号墳は方墳で、これらよりも短い玄室をもつ(奥村1988)。奥壁をほぼ1石で構成することや、羨道が長大であったとみられることなどから前柵2号墳より後出すると考えられる。

(4) 小結

以上のことを踏まえ、石室構造を中心に坂尻古墳群の位置づけを試みる。まず、和束盆地のなかでは竪穴系埋葬施設の要素が強い石室を有する福塚古墳に対して坂尻古墳群は新しい時期のものともみてよいだろう。

次に、加茂盆地では石室の特徴から草ヶ山1号墳とそれ以外で大きく分けることができる。草ヶ山1号墳は坂尻古墳群に似る一方で竪穴系埋葬施設の特徴をもつことから、坂尻古墳群とは非常に近いものやや先行する時期のものと想定する。一方、前柵2号墳の段階になると加茂盆地では大型石材を規則的に積み上げた長大な石室がつくられる。横穴式石室とはいえ羨道が短い坂尻古墳群と比べると新しいと考えられる。

これらのことから、坂尻古墳群は福塚古墳(MT15型式並行期)や草ヶ山1号墳の段階から前柵2号墳(TK43型式並行期)や井手塚古墳の段階に至るまでのおおむね6世紀中葉に2号墳、1号墳の順で築造されたと考えておきたい。多少強引な推論となったことは否めないが、以上が現状の資料から考えられることの限界であろう。今後の資料の増加やそれに基づく評価に期待するとともに、坂尻古墳群の評価について本稿が一つの視点を提示することができていれば幸いである。

(岡田大雄(兵庫県教育委員会))

7. 信楽道

坂尻古墳群の1号墳の南側では、東から南に向かう切り通し状の地形があり、それがさらに南に延びていくことから、道路であったと推測できる。坂尻古墳群の東側では現在の道路によって切断され廃道となっている。この道路は1号墳の裾を削っていることから、古墳よりも新しいことがわかり、また現地には「信楽道」という案内板も設置されている。坂尻古墳群の南は、しばらく切り通し状の廃道がつづいたのち、茶畑の中を通る道路となり、撰原峠の文永4年(1267)銘石造地藏菩薩立像の前に出る。その間、道幅はほぼ3mを計る。

この信楽道は和束谷を抜けて紫香楽に至る主要な道路であり、和束川沿いの府道が通るまでは重要な街道であった。『和束町史』においてもこの信楽道は注目され、明治14年(1881)の「相楽郡村誌」の記載を援用して、ルートの復原がされている(乾1995)。乾幸次氏はこ

それを古代の「恭仁京東北道」にあたと推定しているが、直線的で幅広である古代官道の特徴からはかなり外れており、信楽道をこれに比定することは難しいと考える。

「相楽郡村誌」の撰原村の項によると、

信楽道 村ノ南下嶋村界ヨリ来リ本村中央ヲ貫通シ東折シテ杉田村界ニ入ル 長十八丁
巾一間四尺

とある。隣接する下嶋村では、

信楽道 東方撰原村界ヨリ村ノ中央ヲ貫通シ西方奥畑村界ニ至ル 長四丁一間二尺
巾一間四尺

とあり、同様の道が続いていることがわかる。ただし、奥畑村の記載では下嶋村に続く信楽道の記載がなく、別には和束川右岸の信楽道を記していて、記載に一貫性を欠いている。「巾一間四尺」は、坂尻古墳の周辺での幅3mとほぼ一致し、明治期の道の姿をとどめていることがわかる。また、撰原村と下嶋村の間、今日の道路として利用されている部分でもこの3m幅が観察できる。撰原にある長福寺の大野妙瑞氏からの聞き取り調査では、信楽道は下嶋で南に折れて、和束川の川岸に至り川を渡ったことが知られた。この道は今日でも地図上で確認できる。下嶋から木津川の方に至るルートが最終的な信楽道の姿であったと推測できる。大野氏への聞き取りでは、昭和28年(1953)の水害の際、和束川沿いのバス道(府道5号)が不通になり、和束中学校生であった大野氏たちが坂尻古墳群の脇を通る信楽道を通学路として使っていたとのことであった。

和束谷に西から入る際には、和束川沿いに進むことが難しく、撰原を通るルートが早くに開けていたことは、撰原峠の石造地藏菩薩立像が鎌倉時代に遡ることが明瞭に示しており(横

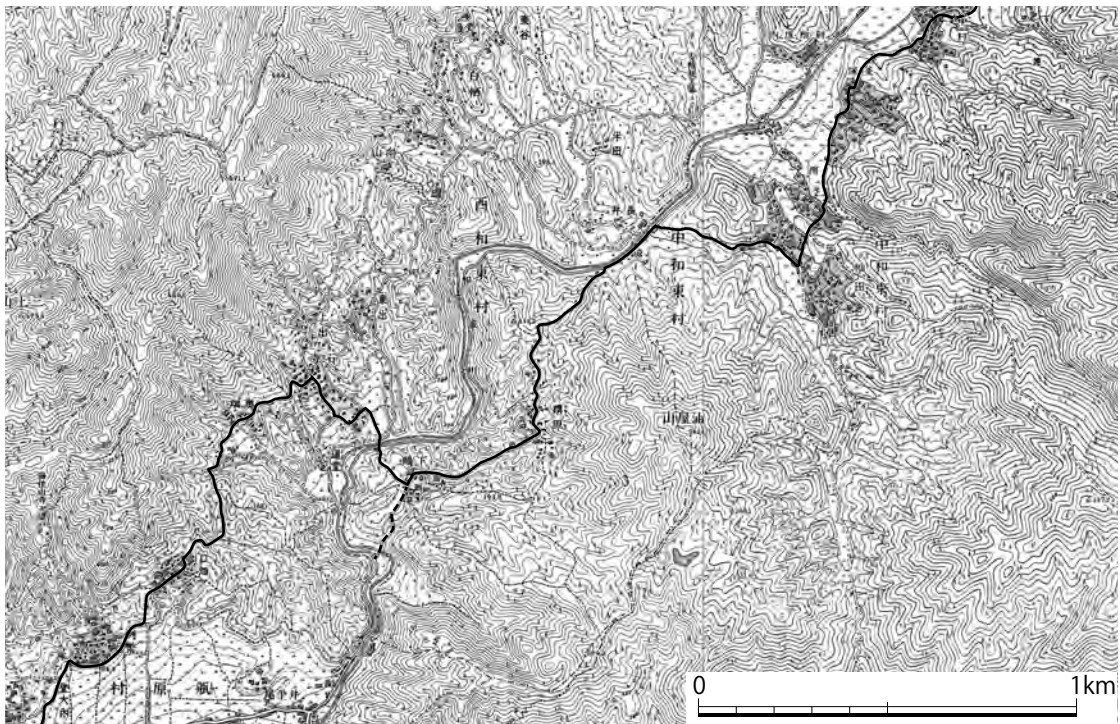


図14 「相楽郡村誌」から読み取れる信楽道(破線は聞き取りによる昭和期のルート)
(背景は正式二万分一地形図「木津」「笠置」)

内 2015)、坂尻古墳の立地もこうしたルートと関係していると考えられる。最初にも触れたように、現状の信楽道は坂尻 1 号墳を壊しているのです、このルートを古墳時代にさかのぼらせることは難しい。坂尻古墳群の開口方向側が西向きであることを考慮すると、もとは坂尻古墳群の西側の谷を下るルートであったとすると説明は付きやすい。和束川の対岸にある正安 2 年(1300) 銘弥勒磨崖仏は、この西側の谷を下りるルートから見る事ができるので、少なくとも中世の段階のルートは坂尻古墳群の西に求めてよいことになる。いずれにしても撰原の信楽道は、和束谷への導入路の復原にとって重要な意味をもっており、また江戸時代の街道の姿をとどめていることも高く評価すべきである。(菱田)

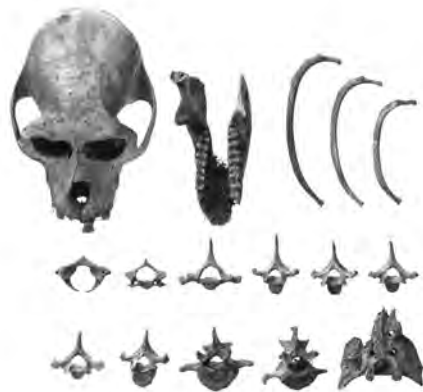


写真3 坂尻 1 号墳採集二ホンザル



写真4 二ホンザル下顎骨に残されたネズミ類の食痕



写真5 坂尻 2 号墳採集タヌキ

8. 石室採集動物骨

(1) 動物骨

1 号墳石室と 2 号墳石室の玄室内に堆積していた土壌から動物の骨が採集された。

1 号墳石室では、玄室東側壁付近に堆積した土壌の地表面に動物骨がまとまっていた。露出していた骨のみを採集したところ、ニホンザルの頭蓋骨、下顎骨、環椎、頸椎、胸椎、腰椎、仙骨、肋骨であった(写真 3)。表採した骨の下にも埋没した骨を確認している。重複する部位が含まれていないため、ニホンザル 1 個体分の骨がまとまっていたとみられる。上顎・下顎とも第三大臼歯まで萌出が完了しており、死亡年齢は 6 歳以上と推定される(岩本ほか 1987)。下顎骨(左)の下顎枝類側面には、ネズミ類の食痕と考えられる平行した 2 つの溝が集中して観察された(写真 4)。骨の露出部分をネズミ類が齧ったものとみられる。

2 号墳石室では、玄室南側壁付近に堆積した土壌の地表面にあった骨を採集したところ、タヌキの頭蓋骨、下顎骨、頸椎、腰椎、肩甲骨(右)、寛骨、大腿骨(右)、肋骨であった(写真 5)。やや散乱していたが、イヌなどの咬み痕は認められなかった。重複する部位が含まれていないため、タヌキ 1 個体分の骨がまとまっていたとみられる。

ニホンザル、タヌキともに現在も和束町でよくみられる野生動物であり(和束町史編さ

表3 坂尻古墳群採集動物骨の測定試料

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44448	試料No.1 坂尻2号墳	種類：骨（タヌキ） 部位：左側頭骨鼓室部 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン コラーゲン抽出
PLD-44449	試料No.2 坂尻1号墳	種類：骨（ニホンザル） 部位：左上顎切歯 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン コラーゲン抽出

表4 坂尻古墳群採集動物骨のコラーゲン抽出の結果一覧表

No.	処理前重量 (mg)	抽出コラーゲン重量 (mg)	コラーゲン収率 (%)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比 (モル比)
PLD-44448	102.27	17.5	17.11	58.4	17.0	4.01
PLD-44449	430.45	63.09	14.66	70.3	18.6	4.41

ん室編 2021)、石室開口後に侵入したものと推測される。(山崎健(奈良文化財研究所))

(2) 放射性炭素年代測定の結果

坂尻1号墳および2号墳の石室内から採集した動物骨について、コラーゲンを抽出し、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定をおこなった。試料No.1(PLD-44448)は坂尻2号墳から出土したタヌキの左側頭骨鼓室部、試料No.2(PLD-44449)は坂尻1号墳で採集されたニホンザルの左上顎切歯である(表3)。

測定を実施するにあたり、試料に超音波洗浄およびアセトン洗浄を施して表面に付着した汚れを除去した後、試料からコラーゲンを抽出した。コラーゲンはEA(ガス化前処理装置)であるFlash EA1112(Thermo Fisher Scientific社製)を用いて炭素含有量と窒素含有量の測定をおこない、得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比(モル比)を算出した。

放射性炭素年代測定では、抽出したコラーゲンを石英管に封じて燃焼し、CO₂ガス化した後、CO₂ガスの精製、グラファイト化をおこなった。グラファイトを、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定し、得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正をおこなった後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表4に、処理前重量(mg)、抽出コラーゲン重量(mg)、コラーゲン収率(%),炭素含有量(%),窒素含有量(%),C/N比(モル比)を示す。コラーゲン収率は、試料No.1(PLD-44448)で17.11%、試料No.2(PLD-44449)で14.66%と非常に高く、1%を大きく上回った。コラーゲンのC/N比(モル比)は正常値とされる2.9~3.6の範囲からやや外れるものの、コラーゲンが深刻な変質を被っている可能性は低い。

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図15に暦年較正結果をそれぞれ示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

ここでは放射性炭素年代測定の結果について、2 σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して整理する。まず坂尻2号墳の試料No.1(PLD-44448)は、1956-1957 cal AD(37.08%)、2007-2008 cal AD(22.37%)、2008-2009 cal AD(36.01%)で、20世紀中頃および21世紀初頭の暦年代を示した。次に坂尻1号墳の試料No.2(PLD-44449)は、1957-1957 cal AD(8.65%)、2002-2003 cal AD(3.47%)、2003-2006 cal AD(83.33%)で、20世紀中頃およ

表5 坂尻古墳群採集動物骨の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号+A2:G5	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-44448 試料No. 1	-21.46 \pm 0.19	-368 \pm 17 $F^{14}\text{C}$:1.0470 \pm 0.0023	-370 \pm 15	Post-bomb NH2 2013, Reimer et al 2020: 1956-1957 cal AD (28.70%) 2008-2008 cal AD (13.54%) 2009-2009 cal AD (26.04%)	Post-bomb NH2 2013, Reimer et al 2020: 1956-1957 cal AD (37.08%) 2007-2008 cal AD (22.37%) 2008-2009 cal AD (36.01%)
PLD-44449 試料No. 2	-24.48 \pm 0.17	-535 \pm 17 $F^{14}\text{C}$:1.0689 \pm 0.0023	-535 \pm 15	Post-bomb NH2 2013, Reimer et al 2020: 2004-2005 cal AD (68.27%)	Post-bomb NH2 2013, Reimer et al 2020: 1957-1957 cal AD (8.65%) 2002-2003 cal AD (3.47%) 2003-2006 cal AD (83.33%)

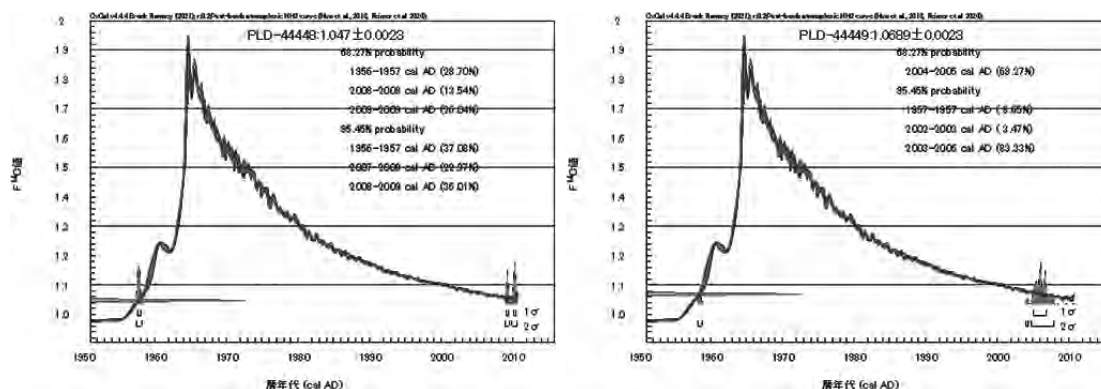


図15 坂尻古墳群採集動物骨暦年代較正曲線（左：PLD-44448、右：PLD-44449）

び21世紀初頭の暦年代を示した。

なお、加速器による計測値ではあるものの、炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$) は -21.46‰ および -24.48‰ で、陸生の値を示しており、海洋リザーバー効果の影響は受けていないと考えられる。

今回測定した試料は、いずれも古墳石室内で採集された試料であり、少なくとも戦後以降に石室内へ侵入した動物であることが可能性が高い。（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）

(3) 小結

動物骨に対する以上の調査知見にもとづけば、1号墳採集のニホンザル、2号墳採集のタヌキともに石室開口後に混入した野生動物とみられ、その時期については1950年代と2000年代の二つに候補を絞り込むことができる。なお坂尻古墳群からほど近い長福寺（和束町撰原）の大野妙瑞氏によれば、石室は坂尻古墳群周辺が茶畑として利用される以前の戦後間もない頃にはすでに開口しており、子供たちの遊び場になっていたとのことである。また本調査に先立ち、1970年代前半に坂尻古墳群を測量調査した奥村清一郎氏（元京都府教育委員会）によれば、当時、石室内に顕著な動物骨はみあたらなかったという。また、奥村氏が京都府立山城郷土資料館に在職中の2015年前後には、1号墳のニホンザルについては認識していたとのことである。これらのご教示と、いずれの動物骨も石室内堆積土上面から採取されたことをふまえば、両動物骨は2000年代に混入した可能性の方が高いといえる。

ここで注意したいのが、1号墳から採集されたニホンザルの残りの骨が石室内堆積土内にまだ確実に含まれていることである。この事実は、もしその混入時期が2000年代であるならば、その後、現在に至る比較的短期間の間に石室外から一定量の土砂が流入したことを示している。参考までに奥村氏による50年前の石室高と今回の石室高を比較すると、1号墳石室、2号墳

石室ともに今回得られた高さよりも、0.2mほど高い数値が示されている（奥村 1990）。同じ位置での計測かわからないため、厳密な比較は難しいが、この半世紀の間に一定量の土砂が流入している可能性は高そうである。1号墳は遅くとも戦後間もない頃には石室が露出していたとのことであり、石室内への土砂の流入自体はそれ以前から始まっていたとみられるが、1個体のニホンザルが一部埋没する程度の土砂流入が近年も起きていることは、石室の恒久的保存にあたって考慮すべき問題であろう。

9. おわりに

最後にここまでの成果を要約し、残された課題を整理しておきたい。墳丘、石室に対する測量調査の結果によれば、1号墳は南西方向に開口する残存長約 3.7m（玄室長約 3.2m）、幅約 1.5m、高さ約 1.2mの横穴式石室を埋葬施設とする墳丘約 13mの円墳、2号墳は西方向に開口する残存長約 3.6m、幅約 1.2m、高さ約 1.1mの横穴式石室を埋葬施設とする墳丘約 10mの円墳であることが確かめられた。両石室の構築には共通性が認められ、古墳時代後期、6世紀中頃に2号墳、1号墳の順に相次いで築造されたとみられる。今回得られた知見の多くは奥村清一郎らによる既往の成果と重なり（奥村 1990）、当時の調査の正確さを追認するに留まった感もあるが、世界測地系にもとづく正確な位置情報や標高情報を取得し、石室については SfM/MVS による三次元計測もおこなうなど、今後の保存活用にあたっての基礎情報を二次元から三次元へ更新できたことは重要であろう。

また古墳の横を通る信楽道については1号墳を壊してつくられていること、両石室の開口方向と和東川対岸にある正安2年（1300）銘弥勒磨崖仏の位置関係から、本来は古墳西側の谷筋を通るルートを通っていた可能性が指摘された。両石室の構造が南方の木津川市加茂町草ヶ山1号墳の石室構造と類似するという事実は、木津川方面から撰原峠を越えて和東盆地へと入る陸上交通路が少なくともこの時期にまで遡ることを示している。

このルートが坂尻古墳群の築造以前にまで遡るのかどうかは、古墳時代中期後半、5世紀後半に始まる和東盆地中央部（東和東）における活発な造墓活動やその意味を考える上で極めて重要であるが、現状では坂尻古墳群以外に手掛かりがない。木津川方面から和東盆地に入るルートについては撰原峠を越える本ルートのほかにも、石寺から東北に進み白栖へと抜けるルートなどが想定され、足利健亮氏らはこちらを信楽道の前身となる恭仁京東北道に比定している（足利 1997、森下 2020）。今年度、撰原峠を挟んで坂尻古墳群の反対側に位置する湯谷ノ原古墳についても墳丘測量調査を実施しており、この問題についてはその成果をふまえて改めて考えてみる必要がある。

ところで、和東町内で石室内に入ることのできる古墳は坂尻1・2号墳を除いて他にない。次章で紹介しているように、和東町では現存する古墳を生きた学習教材として活用していく取り組みを開始しており、それ自体は大変喜ばしいことであるが、一方で石材の崩落や土圧による変形も確認され、安全性を担保した持続的活用にあたっては課題もある。石室採集動物骨に対する年代測定結果からは、近年も石室内への土砂の流入が進んでいることが示唆された。今回取得した三次元データを定点に石室のモニタリングをするなど、活用の前提となる恒久的保存のための対策をあわせて講じる必要があることを付言し、本報告を終えたい。（諫早直人）

参考文献

- 足利健亮 1997 「11- 紫香楽宮に来るには、どんな道を通ったのですか？」『天平の都 紫香楽—その実像を求めて』信楽町
- 乾幸次 1995 「古代の歴史と景観」『和束町史』第1巻 和束町
- 岩本光雄・渡辺毅・浜田穰 1987 「ニホンザル永久歯の萌出年令」『霊長類研究』3
- 奥村清一郎 1988 「南山城の後期古墳（2）」『京都考古』第48号 京都考古刊行会
- 奥村清一郎 1990 「南山城の後期古墳（4）」『京都考古』第55号 京都考古刊行会
- 奥村清一郎 1996 「南山城の後期古墳（6）」『京都考古』第81号 京都考古刊行会
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2020 「和束町和束天満宮における考古学的調査」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第6号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2021 「和束町坂尻古墳群の調査（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 鈴木康大・廣瀬覚・菱田哲郎 2021 「和束町福塚古墳の埋葬施設と埴輪」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 戸原和人・中塚良 1982 「前柵2号墳発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第2冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 長谷川達 1981 「井手塚古墳」『西柵窯跡』（加茂町文化財調査報告 第2集）加茂町教育委員会
- 樋口隆康 1961 「和束三本柿ノ塚古墳」『京都府文化財調査報告』22 京都府教育委員会
- 菱田哲郎・田口裕貴 2021 「和束町二本一古墳出土の須恵器提瓶」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 森下衛 2020 「恭仁京の東北道について」『難波宮と古代都城』同成社
- 横内裕人 2015 「鎌倉時代の和束杣—石造物とその造立背景—」『京都府立大学文化遺産叢書』第9集 京都府立大学文学部歴史学科
- 和束町史編さん室編 2021 『和束の生きものハンドブック』



写真6 坂尻古墳群
全景（南から）

写真7 坂尻1号墳
外観(北から)



写真8 坂尻1号墳
石室羨道側



写真9 坂尻1号墳
石室奥壁側





写真10 坂尻2号墳
外観（西から）



写真11 坂尻2号墳
石室羨道側



写真12 坂尻2号墳
石室奥壁側